The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	20世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ ー感情のリベラリズムからラディカルなネイションへ、そして「わたしのソーシャリズム」へー
Author(s)	大貫, 隆史
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69247
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　大　貫　隆　史　）	
論文題名	20世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ ――感情のリベラリズムからラディカルなネイションへ、そして「わたしのソーシャリズム」へ――

論文内容の要旨

レイモンド・ウィリアムズ（1921-88）は、文化研究やメディア研究の源流としてその名前がしばしば言及される人物だが、そうした評価がなされる際、ウィリアムズ本人や、彼の生きた時代や状況となると、そこにはあまり関心が注がれないことが多い。とはいえ、理論的なものであれ、フィクショナルなものあれ、作品それ自体だけではなく、作品が形成されるプロセス、とりわけその形式がつくり出されるプロセスを記述せねばならないのだと、ウィリアムズがその著述のなかで繰り返し注意喚起していることを考えると、上記の受容のあり方は問題含みのものと言わざるを得なくなってくるだろう。事実、ウィリアムズの死後十数余年を経て2000年代に入ると、その著述のみを純粋に理論的な観点から使用する、というよりは、ウィリアムズの生きた時代のその文脈を浮かび上がらせながら分析し可能性を探る試みが、英語圏や日本語圏で複数登場するようになってきた。

本稿はこうした研究に連なることを目指すものであり、なかでも、ソーシャリストとしてのウィリアムズという位置付けについて、そして死後刊行小説『ブラック・マウンテンズの人びと』（1989-90年）を書くウィリアムズとナショナリズムについて考察を進めるものである。

別な言い方をすると、本論の目的は、ウィリアムズがその死の直前の1987年に口にした「わたしのソーシャリズム」というフレーズの意味と価値を探ることに置かれている。ただし、「わたしのソーシャリズム」というフレーズは、論集『希望の資源』（1989年）に収められた彼のソーシャリズム関連の論考だけを見ても理解しがたいものであり、むしろ、ウィリアムズの小説『ブラック・マウンテンズの人びと』の執筆経験と結び付けることで、その意味と価値がはじめて理解し得るし、さらには、「わたしのソーシャリズム」というフレーズの、ベルリンの壁崩壊と旧ユーゴの内戦を経てなお失われない価値が見えてくるのではないか、という疑問を本論は携えている。

『ブラック・マウンテンズの人びと』は、ウィリアムズの故郷の歴史を旧石器時代から現代まで（実際には絶筆となったため「中世まで」となる）、という数万年に及ぶ長大な時間軸で描く小説である。この小説ならびにその執筆経験と結び付けて、その意味するところを考察していくと、「わたしのソーシャリズム」とは、端的に、「コミュニティ」の全体像を、（あくまで）個人的に構想したものの謂いとなる。ただしその「コミュニティ」の全体像とは、移民流入や征服さらには伝染病による秩序の崩壊といった数々の悲劇に満たされた数万年にも及ぶ歴史を、その材料としながら構想される「コミュニティ」の全体像、あるいは「コミュニティ」の（相互に複雑に絡みあう）過去・現在・未来の流れということになる。

こうしてみると、ウィリアムズのソーシャリズムとは、旧ユーゴの内戦でその価値を喪失してしまうものというより、むしろポスト冷戦期にあってこそ、その価値が理解されてくるようなものであったことが分かってくる。ただし、こうして早急に言い換えてしまうと、ウィリアムズのソーシャリズムは、あたかも「知識人」が「全体像」を人びとに上から押しつけてしまうような、そういうヴィジョンであるかのように解されてしまう恐れが強くなってしまう。

こういう恐れがあったからこそウィリアムズが、「わたしのソーシャリズム」という自家撞着的なフレーズを使用したのだとすれば、「わたしのソーシャリズム」とは、全体像の考案者（あるいは書き手）とコミュニティの人びとのあいだの緊張感と隔たりが強く意識されながらも、それと同時に、書き手と人びとのあいだの隠された「共通性（コミュニティ）」を見いだすことが常に要請される言い回し、ということにもなるだろう。

とはいえ、こうして補足してみてなお、ソーシャリストとコミュニティの人びとのあいだに横たわっているべき「隔たり」をともなった「つながり」のかたちを、イメージしがたいのも事実である。そこで本論が用意するのが、「リベラリズム」（第I部）、「二重視」（第II部）、「ネイション／ナショナリズム」（第III部）という三つの迂回経路である。「リベラリズム」と（その実践でもある）「二重視」について言えばこれは、リベラリズムにたいし冷淡な態度を終始とり続けたウィリアムズの言葉づかいを「裏切る」かたちになる（とはいえ序章で見るように「裏切り」あるいは「嘘を付くこと」はウィリアムズの小説にとって重要な問題系でもある）。しかし同時に、そのウィリアムズが、「個人（individuals）」という問題系に、異様なほどに関心を注いでいたことは否定しがたいのである。そのとき、「自由（リベラル）な個人」をつくり出すためにこそ、集団的な営為が問題となるリベラリズム、それも「言

語」や「感情」を鍵語とするリベラリズムの歴史的な流れ――これを本稿は「感情のリベラリズム」と呼称する――が、ウィリアムズの小説に頻出する「個人」のイメージ、本人の言を借りれば「突飛な個人（quirky individuals）」のイメージをつかむための大きな手がかりとなってくる。

これが第I部の目的となるが、そのために行うのが、「翻訳と自由」という一見して「突飛」な組み合わせを考察する作業である。翻訳の実践が、リベラルな個人を生み出す過程ともなる歴史的な流れ（フロウ）を、翻訳理論の伝統の中に探る。翻訳と言語をめぐるリベラルなフロウ、すなわち本稿の言う「感情のリベラリズム」は、個人と集団とのあいだに独特な関係をつくり出してゆく。同時代のドイツ語から古典古代の言語へ（フリードリヒ・シュライアマハー）、俗物（フィリスティン）たちの英語から「ケルト系」の言語へ（マシュー・アーノルド）、明確な意図をもって創造される言語から、意図することなく創造される言語へ（フェルディナン・ド・ソシュール）と、彼らは、言ってみれば「旅」をする。彼らは属する集団の外に出ることで、集団の営為を観察し、それによって集団の成長に寄与しようとする。

第I部は、この二重視と換言しうる「主要な行為（アクション）」の、その思想を記述するものでもあるのだが、このリベラルな思想は、ソシュールに至って「コミュニティ」と「大衆」をほぼ同義のものとみなす、という陥穽におちいってしまう。ただし続く第II部（第三章から五章）で記述されるのは、個別具体的な「コミュニティ」が二重視の対象として取り戻され、そしてまた失われてしまう様相である。第三章でコリン・マッキネスやリチャード・ホガートを題材にして論じるように、二重視は労働者階級コミュニティの「成長」を考えるとき、その鍵となってゆくのだが、そこでの書き手（ライター）とコミュニティの人びとの関係は、いとも簡単に固定され抽象化したものになってしまうのだった。第四章ではこの、二重視という流れ（フロウ）の「凍結」問題を、ブレヒト再発見者たちを対象としながら論じてゆく。彼らの二重視は、第三章の「才能ある個人」と「大衆」というロマン派的な分離をもたらす「尾根」のごときものを、乗り越えているようでいて、その実そうした分離を逆に強化してしまうことになる。第五章では、こうした境界線あるいは「尾根」を越えようとする試みを、ディヴィッド・ヘア、ブレヒト、ウィリアムズの三者を論じながら考察する。

ただし、第II部を経て明らかになってくるように、書き手（ライター）とコミュニティの分離をもたらす「尾根」の所在は、ひとつではないのだった。「コミュニティ」を「大衆」と見なしてしまう感情のリベラリズムにせよ、「コミュニティ」と書き手（ライター）との関係こそが問われる二重視にせよ、そこには、自由を阻む制約を解消してしまいたい、という「性急さ」がそこに絡みついていたのであり、この感情の所在により、越えがたい「隔たり」あるいは「尾根」があらたに生じてしまっていた、とも言える。コミュニティの「定住者たち」の意図、すなわち、制約を解消するのではなく、それをいわば「やり過ごす」ことで、定住しようとする人びとの意図――彼らの意図をつかみ、それによって、この新たな「尾根」を越えうるのが、ウィリアムズの言う「突飛な個人」なのではないかという疑問を本稿第III部（第六、七、八章）では提出してゆく。

第六章は、続く第七、八章の補助線にあたる章となる。リベラリズムの落とし子としてのロマン主義と自然主義を批判する『現代の悲劇』（1966年）のウィリアムズは、本書第I部の言う「感情のリベラリズム」の問題点、すなわち、「コミュニティ＝大衆」という抽象とは縁遠いように見える。しかし、そこでの二重視の実践は、「イギリス（Britain）」という国民国家を念頭に置いて進めてられていた節を否定できないのである。ただし、こうした失敗があったからこそ、1970年代後半以降のウィリアムズは、「ネイション」という問題系に正面から立ち向かった、すなわち、「ネイション」をコミュニティの人びとから切断された抽象（第七章で見る「人工物」としてのネイション）と見てしまわないという、ごく厄介な問題系に向かったのではないか――この疑問を本稿は提起してゆく。

そこで第七章ではまず、アーネスト・ゲルナー、ベネディクト・アンダーソン、トム・ネアンによる、1970年代後半以降の英語圏ナショナリズム論を概観することで、ネイション／ナショナリズムの「人工性」という共通した論点を浮き彫りにする。その後、こうした支配的なナショナリズムからの逸脱を、トム・ネアンの「ひとつの弁証法」としての「非均質的発展」、レイモンド・ウィリアムズの「場所にまつわる紐帯（プレイサブル・ボンディング）」というフレーズから探る。

第七章を経て、「定住者たち」の複雑な実相、すなわち、「自然かつ人間的」な紐帯を時に数万年の時間軸でつくり出す営みが徐々に見えてくるのだが、続く第八章と終章では、ウィリアムズの小説『ブラック・マウンテンズの人びと』を論じることで、そうした営みを記述しうる書き手（ライター）が、コミュニティ（あるいはラディカルなネイション）と取り結ぶ、ごく複雑な関係を考える。これにより、ウィリアムズの言う「わたしのソーシャリズム」が現代にあって持ちうる意味と価値を見定めてゆく。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 大貫　隆史 ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　准教授	山田　雄三
	副 査　大阪大学　教授	服部　典之
	副 査　大阪大学　教授	片渕　悦久

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　20 世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ
—感情のリベラリズムからラディカルなネイションへ、そして「わたしのソーシャリズム」へ—

学位申請者　大貫　隆史

論文審査担当者
主査　大阪大学准教授　山田　雄三
副査　大阪大学教授　服部　典之
副査　大阪大学教授　片渕　悦久

【論文内容の要旨】

本論文の目的は、カルチュラル・スタディーズの創始者レイモンド・ウィリアムズが、その死の直前の 1987 年に口にした「わたしのソーシャリズム」というフレーズの意味と価値を探ることに置かれている。言いかえると 20 世紀イギリスの文化的な営為のなかで個人と共同体との境界線を越えようとする実践に伴う交錯と緊張感を浮き彫りにすることにある。この目的にもとづき、本論は性急なリベラリズムと長期的な感情のリベラリズムを対比した第一部、ロングタームの視点に欠かせない二重視を扱った第二部、ポストモダンのノマド（放浪的）思考の彼岸にラディカル（根を張った）ネイションの可能性を大胆に論じた第三部から構成されている。

まず第一部では、翻訳の実践がリベラルな個人を生み出す過程を、翻訳理論の伝統のなかに探っている。歴史上見られる翻訳と言語をめぐるリベラルな試みは、個人と集団とのあいだに独特な関係をつくり出してきた。フリードリヒ・シュライアマハーの場合は、同時代のドイツ語から古典古代の言語への関心変化、マシュー・アーノルドであれば、俗物（フィリスティン）たちの英語から「ケルト系」の言語への回帰、フェルディナン・ド・ソシュールにいたっては、明確な意図をもって創造される言語から、意図することなく創造される言語への転換へといった具合にである。彼らは属する集団の外に出ることで、集団の営為を観察し、それによって集団の成長に寄与してきたと大貫氏は論じる。

つづく第二部で記述されるのは、個別具体的な共同体が二重視の対象として取り戻され、そしてまた失われてしまう様相である。大貫氏がウィリアムズに依拠する二重視とは、観察者であると同時に参与者として共同体を見ることを意味していた。第三章でコリン・マッキネスやリチャード・ホガートを題材にして論じるように、労働者階級の共同体の成長を考えるとき、二重視はライターと共同体の人びとの関係を、いとも簡単に固定し、抽象化してしまう。第四章では、この二重視の凍結問題を、ブレヒト再発見者たちを対象としながら論じている。彼らの二重視は「才能ある個人」と「大衆」というロマン派的な分離をもたらす境界線を乗り越えているようでいて、そのじつ、そうした分離を逆に強化していると、大貫氏は論じる。

第二部で扱われるライターたちに共通して、自由を阻む制約を解消してしまいたいという「性急さ」が見られた。そこで、制約を解消するのではなく、それをいわば「やり過ごす」ことで、定住しようとする人びとの意図を

つかみ、それによって多様な境界線を越えうるのが、ウィリアムズの言う「わたしのソーシャリズム」なのではないかというテーゼを大貫氏は第三部で提出する。

第三部で大貫氏はまず、アーネスト・ゲルナー、ベネディクト・アンダーソン、トム・ネアンによる、1970 年代後半以降の英語圏ナショナリズム論を概観することで、ネイション／ナショナリズムの「人工性」という共通した論点を浮き彫りにする。その後、こうした支配的なナショナリズム論からの逸脱を、トム・ネアンの「ひとつの弁証法」としての「非均質的発展」、ウィリアムズの「場所にまつわる紐帯（プレイサブル・ボンディング）」というフレーズから探る。そのうえで最終章では、ウィリアムズの小説『ブラック・マウンテンズの人びと』を論じる。そこでは、数万年の時間軸でつくられる自然かつ人間的な紐帯を想像的に記述するライターが、共同体（あるいはラディカルなネイション）と取り結ぶ複雑な関係が詳らかにされる。これにより、ウィリアムズの言う「わたしのソーシャリズム」が現代にあってもちうる意味と価値が解明されることになる。つまり、「わたしのソーシャリズム」とは、全体像の考案者（あるいはライター）と共同体の人びとのあいだの緊張感と隔たりが強く意識されながらも、それと同時に、書き手と人びとのあいだの隠された「共通性（コミュニティ）」を見いだすことが常に要請される言い回しであり、姿勢表明であったと、大貫氏は結論づける。

【論文審査の結果の要旨】

レイモンド・ウィリアムズ（1921-88）は、文化研究やメディア研究の源流としてその名前がしばしば言及される人物だが、ウィリアムズ本人や、彼の生きた時代や状況となると、そこにはあまり関心が注がれないことが多い。ところがウィリアムズ自身は理論的著作であれ、フィクション創作であれ、作品が形成されるプロセス、とりわけその形式がつくり出されるプロセスを記述せねばならないのだと、繰り返し注意喚起している。そのことを考えると、上記の受容のあり方は問題含みのものと言わざるをえない。事実、ウィリアムズの死後十数余年を経て 2000 年代に入ると、その著述のみを純粋に理論的な観点から使用するというよりは、ウィリアムズの生きた文脈を浮かび上がらせながらその著述を分析し、その可能性を探るという試みが英語圏や日本語圏で複数登場するようになってきた。

本論はこうした研究に連なることを目指すものであり、なかでもソーシャリストとしてのウィリアムズという位置付けについて、そして死後刊行小説『ブラック・マウンテンズの人びと』（1989-90 年）を書くウィリアムズのソーシャリスト的なナショナリズムについて考察を進めるものであった。

審査会では、20 世紀半ばのウィリアムズの洞察が、21 世紀の今日の文化論にどこまで有効なのかといった質問がなされた。これらの質問にたいして大貫氏は、こう答えている。ウィリアムズが残したテクストだけを分析せずに、彼が書いたプロセスを丁寧にたどれば、夫人のジョイとの共同執筆関係やウェールズの共同体の中から生まれた共同体の想像力が浮き彫りとなり、その点にライターと共同体を分断する境界線を越えるヒントが隠されていると。ポスト・ロマン主義を意識したライターの執筆プロセスに関して、今後の研究の発展を確信させる回答であった。ただ、ライターと共同体とのあいだの境界線を越えようとするじつに多様な実践を提示しているため、論の進め方としてはトピックがあまりに広汎すぎる印象を与える。これら広汎な議論がひとつに収れんしているのかという疑問も呈されたが、ひとつの仮説ではないにしても、この問題を考えていくための重要なパラダイムを提示しているとは言えるだろう。その意味で、本論で扱われる対象の多様性は、本論文の本質的な価値を損なうものではない。本論文が、ライターと共同体との関係を新たに構築しようとする独創的な方法を展開しているという点は高い評価に値するとして審査委員の意見は一致した。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。